

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第2号

● 目 次 ●

論点：経済人から見た科学技術交流	1
萬華鏡：モンゴルの地質と鉱物資源（講演要旨）	2
東アジアの顔：東北アジアの都市－ノボシビルスク探訪－	4
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「朝鮮地域」・「中国」	4・5
研究機関紹介：ロシア科学アカデミー・極東支部・火山研究所	6
センター動向	6
日本館便り	7
研究最前線：カムチャツカの火山	7
東北アジア学術交流懇話会，時局講演会並びに設立総会開催される	8
OPINION：私たちの活動	8



経済人から見た科学技術交流



東北アジア学術交流懇話会理事 <日商岩井（株）顧問> 吉田 進

ロシアと日本は隣国であり、お互いに大国である。シベリアは無限の資源と技術力をもっており、日本にとって極めて重要な地域である－西澤会長がよく言われる言葉である。

日本とロシアの貿易・経済協力を論じるとき、私は、まずシベリア・極東の資源・エネルギー開発への投資とその製品の日本への輸入、第二にヨーロッパ部という大型消費市場への製品輸出と工業資本の進出、第三に、ロシアの優れた科学・技術の導入をあげる。かつてソ連時代に日本は、ソ連から100点以上の技術を導入した。そのうち、日商岩井（株）のロシアグループが導入した部分が70%を占める。

鉄鋼関係では、高炉の蒸気冷却法、コークスの乾溜法、縦型・湾曲型・横型連続鋳造法、金型鋳造法、最近では、鉄の石炭還元法"ROMERUTO"などを導入した。水道局のほとんどの浄水場には、水の濾過用装置としてウクライナ・プレスが入っている。

これらの技術は、日本の経済の高度成長期に多くの経済効果をもたらし、輸出にも大きく貢献した。



シベリア定期市・企業向けの展示会場

冷戦時代に、日本の技術は、アメリカの影響を受ける部分が大きかった。原子力、航空・宇宙関係は、その影響下にあった。ロシアはこの分野では、多くの先進技術を持っており、ソ連崩壊後、宇宙関係の技術も部分的に日本へ導入されている。

ノボシビルスクのアカデムゴロドーク（学者の町）における日本館の開設は、学術交流への寄与ばかりではなく、優れた技術の導入に貢献することになる。私の論理でいうならば、日ロ経済協力の第三の戦線が開かれたことを意味する。業界としては、大歓迎だし、これをベースにノボシビルスク州の企業とも交流を強化したい。日本館がその触媒的な役割を果たすことを期待してやまない。

萬華鏡

モンゴルの地質と鉱物資源 (講演要旨)

モンゴル国立技術大学教授・前東北アジア研究センター客員教授

オチル ゲレル 女史

1. 地質構造

プレカンブリア紀の大陸の小地塊(トゥバ・モンゴル(Tuva-Mongolian)地塊、タルバガタイ〔Tarbagatai〕地塊)を含むが、基本的には島弧の地質で、古生代の附加体が発達している。原生代末、古生代末、中生代末の火成活動も活発で、これらに関連する鉱床も知られている。北半部は、大局的に見て東に開いたU字型の盆地構造を持ち、バイドラグ(Baidrag)地塊、ジダ(Jida)褶曲帯、バヤンホンゴル(Bayankhongor)褶曲帯、ハンガイ(Khangai)褶曲帯と、古生代初期～後期の構造帯が分布する。南半分は古生代中期のゴビ・アルタイ(Gobi-Altai)褶曲帯、トランス・アルタイ(Trans-Altai)褶曲帯、南ゴビ(South Gobi)褶曲帯が分布し、中生代後半からの張力場が卓越し、東西方向に平行する数多くの細長い堆積盆地が発達している。(図表1)

トゥバ・モンゴル(Tuva-Mongolia)地塊はプレカンブリア時代のトータル岩質片麻岩、角閃岩、大理石などの変成岩から構成され、古生代初期の花崗岩や花崗閃緑岩により貫入されている。この地塊は炭酸塩岩と火山碎屑岩の互層により被覆されている。この地層は強い変形作用をうけ、古生代初期のカルクアルカリ花崗岩類などの岩石に貫入されている。タルバガタイ(Tarbagatai)地塊はプレカンブリア時代の片麻岩、結晶片岩などから構成され、島弧型の堆積物により被覆されている。これも古生代初期のカルクアルカリ花崗岩類岩石に貫入されている。

上記両地塊に挟まれて分布するジダ(Jida)褶曲帯はカンブリア紀の島弧型火山岩質岩石や堆積岩により構成されている。この褶曲帯は古生代中期の火成活動により特徴づけられる。

バイドラグ地塊は古生代のモンゴル・オホーツク海堆積盆地の基盤として認められ、初期～中期の片麻岩、角閃岩より構成されている。その上部のバヤンホンゴル(Bayankhongor)褶曲帯は中期古生代の乱堆積物からなり、古生代初期のカルクアルカリ花崗岩類岩石に貫入されている。この堆積物は島弧型～背弧海盆のものと推察されている。ハンガイ(Khangai)褶曲帯はモンゴル・オホーツク海盆中央の乱堆積物として中期古生代に堆積したもので、この堆積盆地の最も

南に分布している。

トランス・アルタイ(Trans-Altai)褶曲帯は中期古生代デボン紀の火山岩質堆積岩、砂岩、粘板岩より成る。これらの堆積物は二疊紀～三疊紀の沈み込み帯に堆積したもので、南から北へ沈み込んだものと考えられる。ジュラ紀～白亜紀に上昇したものと思われる。

これらの変成岩、火山岩類、堆積岩などの附加体堆積物に古生代初期、中期、後期及び中生代末にカルクアルカリ花崗岩類岩石など火成作用により、各種鉱床を形成している。

2. 鉱物資源

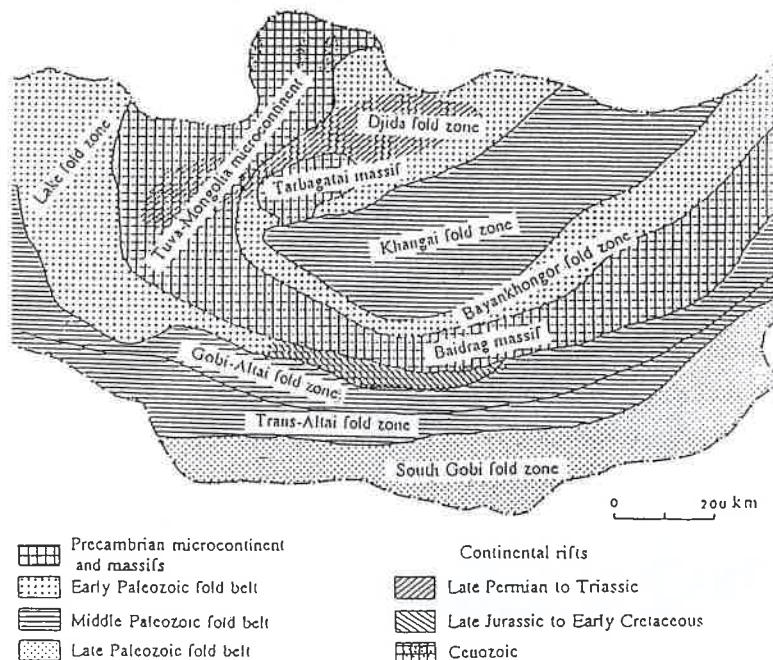
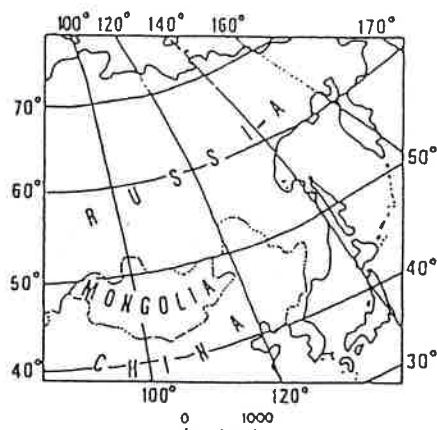
モンゴルでの鉱物資源として鉄鉱床、銅・モリブデン鉱床、鉛・亜鉛鉱床、金鉱床、錫・タングステン鉱床、レアアース金属鉱床、螢石鉱床などがある。これらの鉱物資源の主な産地を図表2に示してある。このほか石炭鉱山、石油鉱山、燐酸塩鉱床、ウラン鉱床、沸石鉱床なども分布している。1994-1997年の資源の産出量は図表3のようで、銅鉱石の産出量が最も大きい。石炭以外は全て輸出し、鉱業で外貨収入の約60%に達する。以下、これらの資源について概説する。

2.1. 金属資源

【銅・モリブデン鉱床】

銅・モリブデンはウランバートルから北西350kmに位置するエルデネト(Erdenet)鉱床地帯が主要な産地である。この鉱山は斑岩銅鉱床型の鉱床であり、1971年モンゴルとソ連の合弁企業として開発され、現在、鉱石として、品位0.7%Cu、0.002%Moで、年間2千万トン採掘している。1974年以来、年間に銅精鉱(35%Cu)35万トン及びモリブデン精鉱1.5-2.0千トン態勢で操業している。この地域の銅の埋蔵量から見て今後60年間生産可能である。モンゴルでは斑岩銅鉱床型鉱床の他、スカルン鉱床、深成岩中の鉱染状鉱床、塊状硫化鉄型鉱

図表1 モンゴル高原の模式的地質構造図
(After Yu.A.Zarin et al.,1993)



床や鉍脈鉍床としても銅が産出する。

【螢石鉍床】

螢石(CaF₂)はフッ素の原材料であるが、モンゴルでのフッ素生産量は世界的な規模であり、中国、メキシコに次いで第三番目に位置する。螢石鉍床の採掘と鉍物処理による生産高はおよそ3.3千万ドルに上り、輸出金額の14%に相当する。主要7螢石鉍床はウランバートルの南東350kmの中央ゴビ地域に集中する。これらのうち6鉍山はモンゴル-ロシアの合弁会社により操業されている。

【金鉍床】

現在、モンゴルの金鉍山は小規模であり、主として砂金鉍床として採掘されてきた。1993年以前には年間1トン程度であり、輸出の3%程度であった。1993年モンゴル政府の産金奨励策が始まり、80以上の企業が北ヘンティー(North Khentii)、バヤンホンゴル(Bayankhongor)、アルタイ(Altai)及び東モンゴル地域で砂金鉍床として操業している。砂金からの産金量は1993年1.2トンから1996年6.0トンと増加してきている。外国及びモンゴルのプロジェクトとして鉍脈鉍床の開発も開始されている。

【錫・タングステン鉍床】

錫・タングステンは合わせて収入の0.2%である。錫は1943年ロシアによりモドト(Modot)の漂砂鉍床が開発されてきた。1970年モンゴル・チェコスロバキアの合弁会社として操業されてきた。

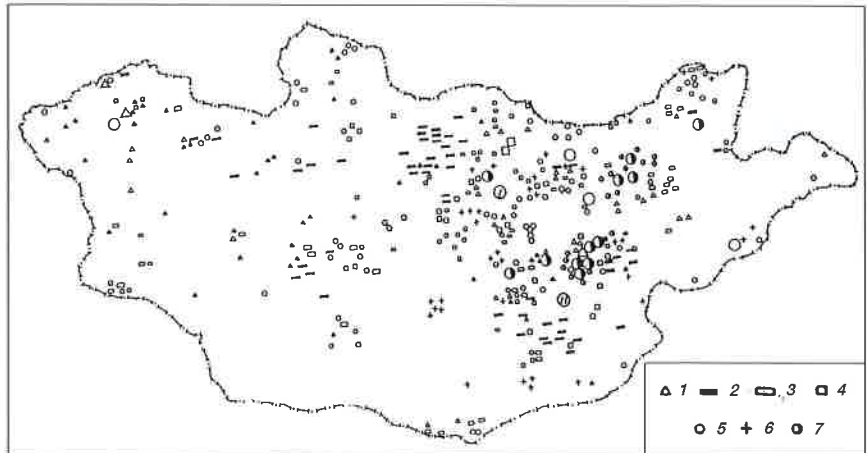
2.2. 非金属資源

【石炭】

モンゴルの石炭の生産は1912年から始まった。石炭の生産高は1970-1980年にかけて増大し、火力発電に用いられている。石炭生産の70%以上はバガノール(Baga Nuur) 年間6百

図表2 モンゴルの主な鉍床及び鉍石産地

／1：鉄、2：銅、3：鉛・亜鉛、4：金、5：錫・タングステン、6：レアメタル、7：螢石



万トン)とシャリン・ゴール(Sharyn Gol) (1.5百万トン) 地方の鉍山からのものである。その殆どの鉍山は露天掘りである。

【石油】

1931-1969年、より近年には1990年代の石油探査の結果ブーンバヤン(Züünbayan)、ツァーガン・エルス(Tsagaan Els)、ウヒン(Ukhin)、バローンバヤン(Baruunbayan)、タムサグ(Tamsag)などで石油が発見された。石油探査の80%は東ゴビ盆地にあるブーンバヤン(Züünbayan)及びツァーガン・エルス(Tsagaan Els)石油地帯で行われている。この開発はアメリカとモンゴルの合弁会社のバヤン石油により行われている。ブーンバヤン(Züünbayan)石油地帯から55万トンの石油を生産している。総生産高は6.336百万トンで、稼採総埋蔵量は1.759百万トン見込まれている。ツァーガン・エルス(Tsagaan Els)石油地帯では95万トンの生産が予想される。これらの石油は中生代の堆積盆地に分布している。

【燐灰土】

モンゴルの海成堆積岩中にシート状の燐灰土が相当量含まれている。これらはフブスグル(Khövsgöl)堆積盆地に濃集している。これと類似した燐灰土の産出が先カンブリア系のザヴハン(Zavkhan)地域にも認められる。フブスグル(Khövsgöl)堆積盆地は長さ300km、幅170kmに亘る。燐灰土の濃集部はヴェンデーカンブリア系の海成火山岩質堆積岩の下部に認められる。鉍石中の燐酸塩鉍物量は10～98%と変化に富む。普通の鉍石で40～98%である。P₂O₅量は17～21%であり、時に34%に達するものもある。

【ウラニウム】

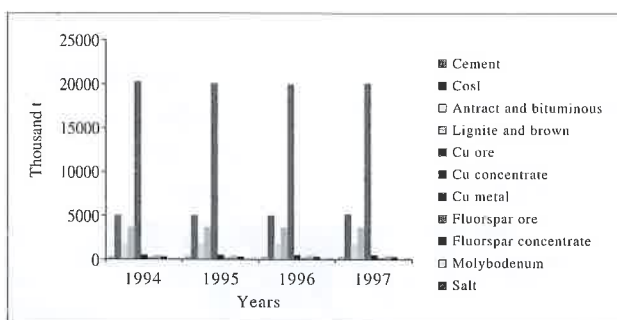
モンゴルでのウラニウムの探査は第二次世界大戦後に始まり、モンゴルとソ連との合同地質調査が開始された。モンゴルのほぼ40%の地域について飛行機による放射能調査が行われた。この調査の結果、ウラニウムを含む地域として4地域が抽出された。これらの地域のうち6ウラニウム鉍床、100個所の産地、および1400個所の放射能の異常地が確認された。

【沸石】

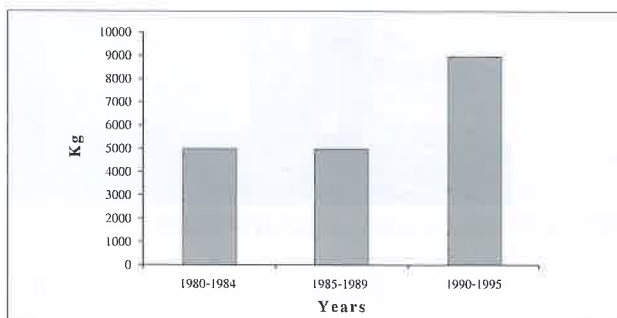
東モンゴルの火山地帯に10沸石鉍床がある。ジュラ紀末～白亜紀のツァーガンツァヴ(Tsagaantsav)沸石鉍床はおよそ160百万トンの鉍量があり、厚さ3～35mに亘り、80%以上の濃度で沸石が見られる。

(訳/文責 北風 嵐、モンゴル語読み 岡 洋樹)

[1998年12月7日資源・素材学会地下計測部門委員会での特別講演/英文資料入手希望者は佐藤源之<sato@cneas.tohoku.ac.jp>まで]



図表3 1994-97年におけるモンゴルの各種鉍石の産出量



図表4 1980年以降の金産出量の推移



●東北アジアの都市

ーノボシビルスク探訪ー

東北アジア学術交流懇話会企画の訪問団に参加して

エコアジア市民フォーラム 前田みゆき



シベリアの玄関・ノボシビルスク駅

ノボシビルスクへの旅は、私にとっては大変実りあるものでした。多くの日本人が、位置する場所はおろか名前すら聞いた事も無いというような街であれだけたくさんの人々が日本に興味を持って、日本語や日本の文化に真剣に取り組んでいるのを見て、本当に驚きました。札幌にいた頃も、ノボシビルスクと姉妹都市だというのに、ノボシビルスクから札幌に向けられている目に比べて、札幌からノボシビルスクへ向けられる目は、余りにも少なかったのではないかと感じずにはいられませんでした。うちの大学（札幌大学）なんか、せっかくロシア語学科があるのに、本当にもったいないと思います。さっそく恩師や友人にノボシビルスクの学生の熱い情熱を伝えたいと思っています。ほんと、なにか力になりたいものですね。

ノボシビルスクの街は、想像に反して、とても明るくて華やかで豊かな印象の素晴らしい街でした。以前、4年前の冬にモスクワとペテルブルクを訪れた際は、絶対にロシアには住めない、と思ったのですが、今回はホントに住んでもいいとさえ思いました！ロシアは、刻々と変化を続けているのですね。いろいろと勉強になる事の多い滞在でしたが、中でも印象深かったのは工場見学とロシア科学アカデミーシベリア支部の展覧会場見学でした。日本でもあんな工場の見学などした事はなかったものですから、大変興味深く拝見しました。私たちのグループにずっと同行してくださっていたロシア人のドクターに「日本でこのよう

な類の工場に行って見た事がありますか？」と、聞いてみましたところ、彼は、「残念ながらそういったチャンスには恵まれなかったけれども、きっと日本には、こんなひどい工場なんてないだろう。見たろう？ほとんどマニファクチュアだ。」と、答えてくれました。マニファクチュアかぁ、そんな印象だったけど、やっぱりロシア人が見てもそう感じるような工場だったんだぁ、と、何だか他の工場と比較してみたくなるような気分になりました。以前は軍事工場だったこの工場が、新しい市場や新しい技術開発を求めて模索を続けているのだ、という彼の言葉に、迷走するロシアの現状をちょっとだけ感じたような気がしました。

アカデミータウンの展覧会場では、一人のドクターから直接彼の研究内容についてお話を伺う事が出来て、とてもおもしろかったです。すごいチャンス！とてもラッキーでした！その方のお話を聞きながら、みんな楽しんで研究してるなぁ、という印象を強く受けました。もう、聞いて欲しくて聞いて欲しくてしょうがない！という感じですね。皆さんのお話を一人ずつゆっくり聞きたかったです。日本の研究者との交流が、もっと活発になるとおもしろいですよね。

AREA REPORT

SIGMA

ロシア 育て、ベンチャー企業！

アカデムゴロドクの街にも、今や24時間営業のスーパーがある。一階は食料品、2階は雑貨などで構成されているモダンなお店である。食料品・雑貨とも、外国製品が目立つが、そうした外国製品の輸入によって人々の暮らしも大きく変わったことであろう。

旧ソ連時代には空白であった商業部門などの小企業は、市場経済化に伴い急速に発展し、雇用のはけ口となっている。ノボシビルスク州は、ロシア連邦構成主



ノボシビルスクのスーパーマーケット

体中、8番目に小企業数が多い。ノボシビルスク市には、1万7千の小企業があり、そのうち総生産額の55%、

従業員数の44%、企業数の35%が商業部門で占められている。

製造業の街であるノボシビルスクの発展には、商業小企業の隆盛だけでなく、製造業中小企業の発展が望まれる。米国国際開発庁USAIDはノボシビルスクにビジネス・サポート・センターを設立し、中小企業、特

にハイテク中小企業への支援、企業家育成、ビジネス・コンサルティングなどを行っている。

日本に熱い視線を送るシベリアを支援するためにも、モノづくりに関わるヴェンチャー企業の育成に日本の役割は見いだせないものだろうか。

(富山大学 堀江典生)

モンゴル モンゴルの創氏改名

モンゴル人の名前は、親の名と本人の名からなり、親の名を姓（オボグ）と呼んでいる。例えばドルジーン・ゴムボという人であれば、ドルジが父親の名、ゴムボが本人の名前、「ーン」というのは「～の」という語尾である。つまりドルジの（子供）ゴムボとなる。ところが事情を知らない外国人には欧米語風に姓、すなわち親の名で呼ばれてしまう。そこでモンゴル政府は、パスポートのFirst Nameの項に姓（親の名）、Surnameの項に名（本人の名）を記すという奇計を考え出した。こうすれば外国でも自分の名で呼ばれることになるが、問題の解決からはほど遠い姑息な発案である。最近モンゴル政府は20世紀初めにはおおかた忘れ去られていた姓の復活を決定した。政府の依頼を受けたモンゴル科学アカデミー歴史研究所は、国内各地でオボグの分布を調査し、姓復活の手引き書を作成

した。モンゴル人がはれて「親離れ」する日は近いのかもしれないが、これには議論百出、国民に受け入れられるには時間がかかりそうである。

(岡 洋樹)



朝鮮地域 もう一つの不安

昨今、韓国の対北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）宥和政策が進められている中、朝鮮半島西海岸での双方軍用艇による銃撃事件、金剛山観光中の韓国女性の拘束等、韓国と北朝鮮とのトラブルが続いている。また、核施設やミサイルの問題も国際的な注目を集めている。ところが、こうした派手な扱いはなされていないものの、事実とすればソウル地域の人々にとっては等閑視できない心配事がある。軍事休戦ラインからほんの数十キロ北側のピョンサン（平山）に北朝鮮が核廃棄物処理場を建設したというのである。百キロほどしか離れていないソウルは、核廃棄物の輸送時の事故

やアスファルト固化など可燃物化された時の火災事故等で環境汚染があればたちどころに被害を被ろう。

ただ、これを以て北の軍事的行為とはいえない。むしろ、経済的理由で、1997年初めの台湾電力会社との放射性廃棄物の管理に関する契約に基づき建設したもので、北朝鮮側からその建設費分の支払い請求がなされたといわれる。契約内容は200リットルのドラム缶1本につきおよそ千ドルで管理し、2年間で6万本を受け入れるものであるとされるが、履行されてはいない。その契約額の安さ故に不安は更に募る。

(成澤 勝)

中国 環境問題から反日運動？

中国にいる友人によると、中国の木材が日本に輸出されて割り箸として使われ、さらに回収された割り箸が再生紙として中国に輸入されていることが、中国国内の報道や環境運動の現場で少しずつ見聞されるようになってきているらしい。ご存じのように、昨年、中国は大きな洪水被害に見舞われた。洪水の原因は多くあるものの、その大きな一つが河川の上流での森林伐採にあることは明かである。したがって森林保護は喫緊の問題であり、そこで木材の輸出規制が現実のものとなってきている。割り箸問題はそのような背景から発生したものであり、再生紙として日本から中国が買っ

ていることがまた感情的な問題を招いているそうである。割り箸の是非に関しては日本でも問題になった。実際には間伐材を使用している場合もあるため、いちがいに悪者にすることはできない。しかし、批判の対象になりやすいことも事実であり、反日感情と絡まって中国では大きな問題になるのだろう。日中双方にとって、環境問題の国際的な側面を考えるよい契機になってくれればありがたいのだか。ちなみに中国では、「誰がアメリカを養っているのか？」という本も出ているそうである。

(明日香寿川)

研究機関紹介

ロシア科学アカデミー・極東支部・火山研究所

火山噴火研究室長 V.V.イワノフ

設立の経緯： ロシア科学アカデミー（RAS）は275年前、1724年、ロシア皇帝ピョートルⅠ世によって創設された。創設の趣旨はロシアの全状態を把握するためであった。1931年、3つの研究所により構成された極東支部がつくられた。1971年、支部は極東科学センターに改組され、さらに後、現在のロシア科学アカデミー極東支部（FarEast Division; FED RAS）に改められた。

現在の極東支部： 本部はウラジオストック市にあり、1998年時点における構成員数は約7400名、支部総裁はG.B. エリアコフ・アカデミー会員である。極東支部は沿海州地域（ウラジオストック市）、ハバロフスク地域（ハバロフスク市）、アムール州地域（ブラゴヴェシensk市）、北東地域（マガダン市）、カムチャッカ地域（ペトロパブロフスク・カムチャッキー市）とサハリン地域（ユジノサハリンスク市）に計6ヶ所の科学センターを有している。センターには総計で35の科学研究所と関連組織とが所属している。代表的な研究所として海洋生物研究所、極東海洋研究所、極東地理研究所、応用数学研究所、化学研究所、極東生有機化学研究所、極東地域考古歴史研究所（以上はウラジオストック市）、火山研究所（ペトロパブロフスク・カムチャッキー市）、地質構造地球物理研究所、経済研究所（以上はハバロフスク市）、海洋地質地球物理研究所（ユジノサハリンスク市）アムール複合研究研究所（ブラゴヴェシensk市）などがある。

火山研究所（IV FED RAS）： 本研究所はカムチャッカ州の州都ペトロパブロフスク・カムチャッキー市にある。カムチャッカの火山観測は1930年代より継続的に行われてはいたが、火山研究所は1962年、B.I. ピップ教授によって設立された。同研究所はカムチャッカ科学センターの中では最も大きな研究所であり、1999年時点で約250人のスタッフを擁している。研究所長はS.A. フェドトフ・アカデミー会員であり、同時にカムチャッカ科学セ

ンターの議長も兼ねている。研究所は火山活動・地質部門、地球物理部門、カムチャッカ火山観測所（クリューチ町）、地熱・地球化学部門と物理・化学技術部門の5部門から構成されている。同研究所はロシアにおける火山と地熱についての唯一の研究所である。代表的な業績としてはカムチャッカ及び千島列島の活火山カタログの作成、1975年のトルバチュク火山と1996年～1999年にかけてのカリムスキー火山における大規模割れ目噴火の研究が挙げられる。研究所のジャーナルとしてロシア語“Vulcanologia i Seismologia”があるが、Gordon and Breach社より英語翻訳版である“Volcanology and Seismology”が出版されている。1991年から1994年にかけて、火山研究所はロシア科学アカデミー極東支部に属する火山研究所（IV、約250人）、火山地質地球化学研究所（IVGG、約75人）と科学研究地質技術センター（SRGC、約65人）の3組織と、ロシア科学アカデミー地球物理サービス（GSRAS）に属するカムチャッカ実験・技術・地震学部門（KEMSD）の計4組織に分割された。

（訳/文責 谷口宏充）

火山研究所（カムチャッカ州ペトロパブロフスク・カムチャッキー市）



センター動向

7月および8月現在の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

☆渡邊幸治（ワタナベ、コウジ）教授：経済団体連合会特別顧問・前在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究

☆小谷凱宣（コタニ、ヨシノブ）教授：名古屋大学人間情報学研究所教授、東アジア北アジア交流論

☆横山隆三（ヨコヤマ、リュウゾウ）教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

☆Victor Ivanov（イワノフ、V.）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・極東支部火山研究所教授、カムチャッカにおける爆発的火山活動

☆劉世徳（リウ、セツク）教授：中国、中国社会科学院文学研究所教授、日本における中国古典小説版本の研究

☆朝克（チャウ、ク）教授：中国、中国社会科学院民族研究所教授、ツングース・満州系諸民族の基層文化に関する言語文化論的研究

☆汪立珍（ワン、リッヂン）研究員：中国、中央民族大学講師（中国政府派遣研究員）、満族文化史/ツングース論

☆陳春林（チン、シュンリン）研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析に関する計算機シミュレーション

日本館 便り

nihonkan-dayori

今年の3月22日にノボシビルスクに到着し、堀江典生氏に次いで二代目の日本館代表を務めています。当地で働き始めた頃はまだ辺り一面雪景色で日中気温はマイナス15度程度でありシベリアの寒さを体感したのですが、5月以降は雪は完全に消え現在は緑でおおわれています。日本館はノボシビルスク市内から車で40分程離れたアカデミータウンという研究都市にあるのですが、ここには主に研究者が住んでおり一種の研究者共同体を形成しています。

アカデミータウンの中には研究所だけでなくノボシビルスク大学も存在します。その大学の東洋学部は日本語学科がありますが、そこで学ぶ学生との対応が最近増えてきています。ノボシビルスクでは日本語学習熱が高いのですが、日本人教師は極めて少なく日本語文献も不十分であり、状況の改善を求めるため彼らが日本館を訪ねてくれたのが最初の出会でした。学生の声にセンター職員の皆様が好意的に対応してくださり、彼らのために現在日本関係の文献を献本してもらい、日本館へ送っていただく計画が進行中です。

4月末に学術交流懇話会が設立され、懇話会の事業の第一段として徳田先生が民間から希望者を募り代表団を組織されました。去る6月6日から4日間、民間の代表団が

ノボシビルスクを訪問し当地でのビジネスの可能性を探られましたが、その際に日本館としてもサポートを行いました。民間からは6名の方が参加され、ノボシビルスク商工会議所、市長への訪問等、盛りだくさんのプログラムをこなしノボシビルスクの魅力を理解して帰国されたように思われます。

現在、日本政府はロシアへの協力として企業経営者養成講座をロシア各地で実施していますが、ノボシビルスクでも7月12日から4日間「日本における企業経営」というテーマで「マーケティング」「企業財務」等の講座が開催される予定です。このセミナーは日本館の仕事とは直接つながるわけではありませんが、無機化学研究所および日本館はできうる限りの協力を申し出ております。

ノボシビルスクはまだ日本では知名度の低い都市ですが、潜在力は極めて高いため今後日本館を通じてノボシビルスクの魅力を発信していこうと考えています。

(塩谷昌史)



日本館の入っている
ロシア科学アカデミ
ーシベリア支部無機
化学研究所

研究 最前線

昨年の夏、始めてロシア・カムチャッカの火山活動の様子を観察する機会を得た。場所はカリムスキー火山で、数分～10分おきに小規模な爆発的噴火を繰り返していた。世界中を見ても、このように“手ごろな”噴火はあまりあるものではない。

こう印象づけられたのは、ドラスティックな進展の乏しい火山学の現状において、それを打破するためには思いきった研究手法などの改革が必要である、と考えていたからである。その例として、火山探査用ロボットなど新しい観測機材の開発や、噴火が実際に発生している火山で、能動的な実験を行うことのできるテストフィールドを設ける、などが挙げられる。テストフィールドが持つべき条件は、手ごろな噴火が常時発生していること、そして近くに迷惑をかける人家などが無いことが絶対的である。国内において、このような条件の火山を探すのは極めて難しい。しかし、ヘリコプターでしか近づくことが困難なカムチャッカの火山では、周囲には人家も見あた

カムチャッカの火山

らず、極めて有望と見受けられた。

テストフィールドではどのような実験が可能であろうか？ 私たちのグループでは火山探査用ロボット車と航空機からの投下型観測機材の開発を計画している。ともに、人間が近づくことの困難な火砕流や火山性爆風の物理的状態を観測し、火山現象のダイナミクス理解という理学的な目的を満たすばかりでなく、火山災害現象の広がりを数値シミュレーションにより予測するための基礎データの蓄積を計るためでもある。このような新機材をテストし、さらに将来的には、噴火現象制御のための能動的実験も可能であろう。例えば、適当な深度まで貫通して少しずつガス抜き作業を行う機材を開発し、重大な噴火が発生する前に、ガス抜きによって火山を無害化するというのはどうであろうか？

いずれにしても、新技術の開発と同時に、日露間の緊密な共同研究体制の構築が実現のための重要な鍵であることは確かである。

(谷口宏充)



東北アジア学術交流懇話会、 時局講演会並びに設立総会 開催される

去る4月27日、大手町の経団連会館において東北アジア学術交流懇話会時局講演会および設立総会が開催された。準備した70席がほぼ満席の状況の中、時局講演会では経団連顧問で前在ロシア大使の渡邊幸治・東北大学東北アジア研究センター客員教授が、計画経済の引力から未だに解き放たれぬまま、市場経済化をはじめ諸方面で改革に努める最近のロシア情勢の具体的な検証を試みられた。中でも、現在ロシアにおいて真剣に取り組まれている、徴税納税やあ



西澤会長の挨拶

るいはマフィアの問題等昨今のロシアが抱える悩みについて、急激な社会の変化に国家機能が十分についていけない故のものとして分析し、あくまでも一時的な現象であるとの見方が示された。また、ロシアに蓄積されている知的資源の日ロ共同利用に関する講話は聴衆の強い関心を引いた。

るいはマフィアの問題等昨今のロシアが抱える悩みについて、急激

な社会の変化に国家機能が十分についていけない故のものとして分析し、あくまでも一時的な現象であるとの見方が示された。また、ロシアに蓄積されている知的資源の日ロ共同利用に関する講話は聴衆の強い関心を引いた。

更に、時局講演会に引き続き、設立総会が開かれて、「東北アジア学術交流懇話会会則」が採択され、また役員団が選出された。そして、理事に選出された三塚博・元大蔵大臣および阿部博之・東北大学総長から、21世紀に向けて本懇話会の担う役割の重大さが説かれた。

(成澤 勝)



渡邊客員教授の講演

OPINION

● 私たちの活動

新潟に環日本海経済研究所という、北東アジア地域経済の調査・研究、交流事業を実施している研究機関のあるのをご存じでしょうか。ここは、通商産業省の認可を受け1993年10月1日に設立された財団法人です。基金は提唱者である新潟県、新潟市、宮城県を始めとする東北6県、群馬、長野、富山、石川の10県1市、その他民間企業からの出捐によっています。対象地域は日本、朝鮮半島（含北朝鮮）、中国東北3省（黒龍江、吉林、遼寧省）、ロシア東シベリア、極東地域及びモンゴルです。

こうした地域に対しては大学等のアカデミズムからのアプローチももちろん重要ですが、そうした純粋な学術研究のみにとどまらず、設立当初から出捐自治体内企業による対象地域進出に際しての支援も視野に入れ、理論

環日本海経済研究所 佐藤 尚

と実践の両面での活動を目指し関係各国、及び国連等関係国際機関との連携にも努めております。

「日本海」という字句ひとつを取っても、日本支配の歴史を想起させるため、朝鮮半島では禁句扱いにしているのが現状です。当研究所ではこうした状況にも配慮し、英語名は「Economic Research Institute for Northeast Asia」とし、通称はその頭文字をとり「ERINA」（エリナ）としております。

名称ひとつにも注意が必要な地域ではありますが、地域の共通項としての高い教育水準、宗教・民族対立の不在といった好条件を踏まえ、経済交流の促進を通じ冷戦の残滓である政治対立、領土問題等の克服に向けての行動も不可欠と考えます。



今号も、ロシアとの交流に関する記事を主軸としました。本誌編集の過程でさまざまな分野のロシア人研究者と語り合いますが、いずれの方からもアカデミズムを通して真摯に語り合おうとする友誼を強く感じます。盲目的な損得勘定やショービニズム、また情緒的友愛主義や或いは先入観的な警戒観念とは縁遠いものでした。

(成澤 勝)

《うしろ》（東北アジア学術交流懇話会ニュースレター）第2号 1999年7月27日発行
発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニュースレター編集委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE/FAX 022-217-3599
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon/> E-mail : gon@cneas.tohoku.ac.jp